

基本方針						令和7年度達成目標		成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）	
「指定管理者提案書」に掲げた「6つの事業」に基づき、江戸東京博物館の基本方針を以下のとおりとする。 1. 資料：歴史と文化の〈継承〉 (1) 61万点の「江戸博コレクション」を都民のかけがえのない文化遺産として、未来の都民へと継承すべく大切に保管する。 (2) 東京2020大会に関わる資料を積極的に収集し、その「レガシー」としてアーカイブ化を促進する。 (3)大規模改修について、収蔵品の計画的な搬出等、着実に準備を進める。 2. 展示：歴史と文化の〈発信〉 (1) 常設展示を中心として、豊富な実物資料や精巧な複製・模型を活用し、またICT技術を駆使した多面的な展示解説などによって様々な層に対し「江戸東京の歴史と文化」の多彩な魅力を発信する。 (2) 特別展は、江戸東京という都市史を主題とした当館の固有性に基づき、質が高く魅力にあふれ、オリジナリティあふれる企画を開催する。 3. 教育：歴史と文化の〈学舎〉 これまでの教育普及事業を発展させていくとともに、子供・高齢者・外国人・障害者と対象を絞り、「少子高齢化」や「成熟社会」の到来など、時代の要請に応じた新たな教育普及プログラムを開発のうえ実践する。 4. 運営：歴史と文化の〈拠点〉 「3S方針」(Safety：安全・安心、Service：おもてなし、Sense of Wonder：感動する博物館)を堅持する。とりわけ、災害やテロ対策をはじめとする「危機管理」については、最優先の課題として全館を挙げて取り組む。 5. 研究：歴史と文化の〈究明〉 江戸東京学の研究センターとして、「江戸東京の歴史と文化」をテーマとする調査研究を促進し、その成果を展示をはじめ、さまざまな事業に反映させ都民へ還元する。 6. 交流：歴史と文化の〈展開〉 (1) 北京首都博物館・ソウル歴史博物館・瀋陽故宮博物院と、国際シンポジウム、学芸員の相互派遣、交流展等の国際交流を引き続き促進する。 (2) 東京都の姉妹友好都市をはじめ、世界の主要都市に所在する博物館において交流展を開催する等、更なる交流を推進する。 また、国際博物館会議を国際交流促進の場として捉え積極的に活用し、江戸東京博物館のプレゼンスを向上させていく。 (3) 両国・深川地域の文化施設、区、関連機関等との連携を強化し、地域の活性化や各施設の回遊性を高める取り組みを行う。						資料：歴史と文化の〈継承〉 ●「江戸東京の歴史と文化」を国内外に発信できる資料の収集を行うとともに、「江戸博コレクション」を適切に管理保管する。 ●収蔵資料の全件公開に向けて、デジタルアーカイブスを充実させるため、資料データの整備を促進する。 ●大規模改修工事に伴い外部倉庫に移動した資料を適切に保管するとともに改修後の再収蔵の手順を検討する。	1	評価指標	デジタルアーカイブスでの公開画像点数
						展示：歴史と文化の〈発信〉 ●大規模改修工事に伴い常設展示室の改修工事及び展示準備を行い、リニューアルオープン後も「江戸博コレクション」を最大限に活用できる展示計画を準備する。 ●休館中もたてもとの園や他の博物館等で開催される展覧会に協力・監修し、館の存在感発揮に貢献する。 ●リニューアルオープン後の魅力的な展覧会の計画を準備する。	2	評価指標	常設展示及び展覧会計画の準備
						教育：歴史と文化の〈学舎〉 ●博物館へのアクセスが難しい対象に向けて、クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー事業として移動博物館を実施する。 ●リニューアルオープン後の教育普及事業の運用を構想する。	3	評価指標	移動博物館事業の満足度
						運営：歴史と文化の〈拠点〉 ●お客様の安全・安心を第一として、あらゆるミュージアムシーンにおいて、おもてなしの質の向上を図るとともに、展示との連携などにより体験価値を提供し、幅広いお客様をお迎えできるよう、リニューアルオープンの準備を着実に進める。 ●リニューアルオープン後の来館者増に確実に結び付くよう、SNSの更なる活用をはじめ綿密な広報戦略により、休館中においても江戸東京及び江戸博の魅力を国内外に広く発信するとともに、リニューアルオープンイベントが効果的なものとなるよう準備に取り組む。	4	評価指標	リニューアルオープンに向けた施設運営計画の準備
						研究：歴史と文化の〈究明〉 ●大規模改修工事中もレファレンスサービスを実施し、都民サービスの継続を図る。リニューアルオープンに向けて、7階図書閲覧室に書架や閲覧机等の必要什器を設置し本の配架を行う。また7階エレベーター前ホールを刷新し、来館者が誰でも本に親しみ、手に取ってくつろげる場となるよう環境を整える。 ●江戸東京の歴史と文化に関する調査研究（外部機関との連携を含む）の成果を『紀要』、『史料叢書』などの出版物、「えどはくカルチャー」の実施をとおして広く都民に還元する。	5	評価指標	司書によるレファレンスサービスの継続、『紀要』、『史料叢書』などの出版、カルチャー満足度
						交流：歴史と文化の〈展開〉 ●都民はもとより世界各地の人びとの注目を集めるべく、江戸東京博物館が持つ豊富な情報を広く深く発信する。 ●江戸東京博物館を、両国→墨田→東京→日本における江戸東京の歴史と文化の発信拠点としてさらに定着させる。 ●アジアや欧米の主要都市の博物館・美術館との交流を、さまざまな事業を通して促進する。	6	評価指標	国際的なプレゼンスの向上（海外の研究者や研究機関との研究交流件数）
							7	評価指標	
							8	評価指標	
								評価指標	
総合的な所見（自己評価の総評）									
長期休館4年目においては、博物館の魅力向上のための設備や展示の改修を東京都と調整しながら進め、併せて博物館運営のために必要な施設・設備等の再整備を行った。展示事業では、全国各地で巡回展を継続開催したほか、オープン後の特別展のラインナップを策定した。また、教育普及事業としては、継続的に実施している「移動博物館」を、式根島や特別支援学校などの来館が難しい方たちへ展開し、新規ボランティアとなるサポートスタッフについても募集・選定を行った。その他、収蔵資料のデジタルアーカイブスやスマホアプリ「ハイパー江戸博」の開発を継続するなど、デジタルコンテンツも充実させ、休館中も様々な場所や媒体で楽しんでもらえるよう、事業を継続した。また、都美術館等での「えどはくカルチャー」の開催、ソウル歴史博物館で開催された国際シンポジウムへの参加や同館開催の特別展への協力による相互交流を行い、紀要等の刊行により調査研究の成果についても発表した。そして、リニューアルオープンに向けた機運醸成イベントとしてオープン100日前イベントの開催、オープン当日イベントの実施など継続的な広報を展開し、期待を高め、オープン当日には多くの来館者を迎えた。リニューアルオープンという大きな目標に対して、職員全員が創意工夫しながら積極的に業務に取り組むことができた。									

外部評価 評価結果		総括的な意見（総評）	
A		リニューアルオープンに向けた施設・設備等の再整備をはじめ、巡回展の継続開催や特別展のラインナップの策定、収蔵資料のデジタル発信など、4年間にわたる再開館に向けた準備作業を着実に進め、計画通りに再開館したことを高く評価する。リニューアルした常設展示は準備期間中の成果と熱意が伝わる内容となっていた。またそれだけでなく、休館中に収蔵資料の保管、保存環境の維持、資料収集、調査研究、情報発信等、基本機能の継続・充実が図られていることも評価でき、学芸員、職員諸氏の大変な負担があったことと思われるが無事に完了したことが喜ばしい。	
A：目標を十分に達成し、成果を上げている B：目標を概ね達成している C：目標を十分に達成しておらず、改善が必要である		休館中の情報発信活動として、施設への来館が難しい島嶼部や特別支援学校等を対象とするワークショップ等の取り組みは、今後の江戸博にとっても重要な事業であり、再開館も継続して充実を図ることを期待する。オンライン環境を活用した情報発信、資料情報のデジタル化の推進も進んでおり、プログラム内容の充実により、江戸・東京の歴史文化に対する社会的関心を高め、興味を深める成果が見られる点も評価したい。 本館施設の再開館に向かう煩雑な業務状況において、都・財団との安定した連携体制の下で、財団との連携によるガバナンスの確保とともに、現場のマネジメント、職員の役割を理解したオペレーションが、しっかりと機能していることが計画通りの再開館の実現につながったと考える。今後も、これまで蓄積してきた江戸博のスキルとノウハウを活かし、両国地域を牽引する施設としての活動に加え、オーバーツーリズム対策、多言語対応、ユニバーサルデザインの深化なども進め、日本の中核的都市博物館として、更なる充実を期待したい。	

基本方針						令和7年度達成目標		成果と課題(評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応)	
「指定管理者提案書」に掲げた「6つの事業」に基づき、江戸東京博物館および江戸東京たてもの園の基本方針を以下のとおりとする。 1. 資料:歴史と文化の〈継承〉 (1) 61万点の「江戸博コレクション」を都民のかけがえのない文化遺産として、未来の都民へと継承すべく大切に保管する。 (2) 東京2020大会に関わる資料を積極的に収集し、その「レガシー」としてアーカイブ化を促進する。 (3)大規模改修について、収蔵品の計画的な搬出等着実に準備を進める。 2. 展示:歴史と文化の〈発信〉 (1) 常設展示を中心として、豊富な実物資料や精巧な複製・模型を活用し、またICT技術を駆使した多面的な展示解説などによって様々な層に対し、江戸東京の歴史と文化の多彩な魅力を発信する。 (2) 特別展は、江戸東京という都市史を主題とした当館の固有性に基づき、質が高く魅力にあふれ、オリジナリティあふれる企画を開催する。 3. 教育:歴史と文化の〈学舎〉 これまでの教育普及事業を発展させていくとともに、子供・高齢者・外国人・障害者と対象を絞り、「少子高齢化」や「成熟社会」の到来など、時代の要請に応じた新たな教育普及プログラムを開発のうえ実践する。 4. 運営:歴史と文化の〈拠点〉 「3S方針」(Safety:安全・安心、Service:おもてなし、Sense of Wonder:感動する博物館)を堅持する。とりわけ、災害やテロ対策をはじめとする「危機管理」については、最優先の課題として全館を挙げて取り組む。 5. 研究:歴史と文化の〈究明〉 江戸東京学の研究センターとして、「江戸東京の歴史と文化」をテーマとする調査研究を促進し、その成果を展示をはじめ、さまざまな事業に反映させ都民へ還元する。 6. 交流:歴史と文化の〈展開〉 (1) 北京首都博物館・ソウル歴史博物館・瀋陽故宮博物館と、国際シンポジウム、学芸員の相互派遣、交流展等の国際交流を引き続き促進する。 (2) 東京都の姉妹友好都市をはじめ、世界の主要都市に所在する博物館において交流展を開催する等、更なる交流を推進する。 また、国際博物館会議を国際交流促進の場として積極的に活用し、江戸東京博物館のプレゼンスを向上させていく。 (3) 多摩地域の文化施設、関連機関などとの連携を強化し、地域の活性化や各施設の回遊性を高める取り組みを行う。						資料:歴史と文化の〈継承〉		●八王子千人同心組頭の家では損傷の激しい表層茅の葺き替えを行い、伊達家の門では番所のむくり屋根の瓦を葺き替えた。三井八郎右衛門邸は耐震工事を行ったことで、安全性が増し、来園者の見学をより可能とした。	
						●30棟の復元建造物に対し、長期修繕計画に則り修繕を実施する。また、緊急修繕工事や日常の軽微な補修等を確実に遂行し、来園者の安全確保と文化財の保存管理を図る。			
1						●旧武蔵野郷土館所蔵資料の適切な保存管理を継続し、「江戸博コレクション」の一部として江戸東京博物館デジタルアーカイブスへの掲載準備を進める。		●前年度に引き続き、園内のアーカイブ資料をデジタル化することで、掲載への準備を進めた。	
						評価指標	長期修繕計画に基づく修繕の実施状況		修繕及び耐震工事を施すことで、建物の保存環境と来園者の安全性を高めた。
2						展示:歴史と文化の〈発信〉		●復元建造物内では季節感のある展示を行い、ホームページやSNS等を活用し、建造物・事業・自然など幅広い情報を発信した。	
						●復元建造物の展示や情景再現事業は、季節感の演出など体感性の向上に努める。また、ホームページやX(旧Twitter)などのSNSを活用した情報発信を推進する。			
3						●休館中の本館に代わり、江戸東京の歴史と文化の発信と継承に資する特別展示を開催する。		●「江戸東京博物館コレクション 江戸東京のくらしと食べ物」を開催し、休館中の江戸東京博物館に代わって江戸東京の歴史と文化の魅力を発信した。	
						評価指標	令和7年度観覧者数		287,609人(達成率115%、対前年度比123.3%)
4						教育普及:歴史と文化の〈学舎〉		●「昔くらし体験」を小学校学習指導要領と内容を連動させながら実施した。昔暮らした家の間取りを語るワークショップ等を実施した。	
						●「昔くらし体験」をはじめとする様々な教育プログラムを実施して、楽しく学べる博物館の実現をめざす。			
5						●高齢化や共生社会などの社会課題の解決に貢献する「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー」事業に園の特性を活かしながら取り組む。		●各復元建造物を手話・字幕・音声で解説した動画を15本作成したり、視覚障害者当事者が参画するワークショップを行った。	
						評価指標	教育普及事業の参加者数		昔くらし体験16校・1,162人(対前年度比83.4%) 情景再現事業・54,242人(対前年度比133.2%)
6						運営:歴史と文化の〈拠点〉		●「危機管理」を最優先の課題に掲げ、「来園者」「園スタッフ」「博物館資料」のいずれも大きな事故なく安心安全の運営を実現した。	
						●「来園者」「園スタッフ」「博物館資料」の安全確保を第一に、「危機管理」を最優先の課題として取り組む。			
7						●ショップやレストランをはじめ、あらゆるミュージアムシーンにおいて、来園者の心に残るような行き届いたサービスを提供する。		●カフェで季節限定メニューを実施したり、盲ろう者の団体の来園時に囲炉裏の煙のにおいや子宝湯の浴槽の手触りなどで視覚と聴覚以外での楽しみ方を提供した。	
						評価指標	顧客満足度		総合満足度(「満足」と「どちらかといえば満足」の合計)は99.3%
8						研究:歴史と文化の〈究明〉		●人の生活に必要な衣食住において、住の専門博物館で建造物を見ることに加え、食を取り上げたことで、生活に根ざした食一住のつながりを展示することができた。	
						●復元建造物の展示や解説を充実させるとともに、建築の専門博物館にふさわしい特別展などを開催する。			
9						●旧武蔵野郷土館資料を中心に、多摩地域の文化資源の調査研究を進める。		●「たてもの園鑑賞ナビ」において日英に加え、中国語(繁体・簡体)及び韓国語を追加することで、より一層インバウンドに対応する体制を整えることができた。	
						●「たてもの園ナビ」の機能を充実させ一層の普及をはかる。			
10						交流:歴史と文化の〈展開〉		●小金井市官公署連絡協議会に参加し、同会会員の小金井市、小金井市商工会、小金井市観光街おこし協会、消防署・警察署、小金井公園サービスセンターなど、たてもの園の運営に必須の関連団体と積極的に交流をはかり、地域連携・活性化に寄与した。	
						●小金井市をはじめとする関連諸団体と連携しながら、相互に広報協力を実施することにより、発信力の強化を図る。			
11						●多摩地域唯一の都立文化施設として地域の博物館をはじめ広く内外の野外博物館と連携し、地域の活性化に寄与する。		●東京都三多摩公立博物館協議会や全国文化財集落施設協議会での活動により、地域博物館、専門博物館として必要な役割を果たすことができた。	
						評価指標	地域等との交流実績		小金井市民祭り・桜祭りに協力し、建築を専門とする博物館、多摩地域の博物館との交流を促進した。
12						7			
						評価指標			
13						8			
						評価指標			
総合的な所見(自己評価の総評)									
令和7年度のたてもの園は、来園者目標を大きく上回る287,609人の来園者数を達成した。これはスタジオジブリ関係の特別展を実施した平成15年(「江戸東京たてもの園と千と千尋の神隠し」、平成26年(「ジブリの立体建造物」展)を除くと過去最高の実績であった。それに加え大きな事故なく安心安全な運営のもと、予定していた事業を全て計画通り実施し、高い満足度達成することができた点は大きな成果であった。また現在都内の公園で樹木倒木が頻発している状況のなかで、いち早く危険木の緊急伐採を実施するとともに、R8年度の計画的な予防伐採を実施するための準備を行なった。そのうえで、5つの情景再現事業を着実に実施し、楽しく学ぶ機会を提供するとともに、子どもや高齢者ばかりでなく、外国人、障害をもつ方を含めた全ての人がたてもの園を安全に利用できるような仕組みやプログラムの整備をすすめ、本格実施初年を迎えたワークショップクリエイター育成プログラムを計画通り実施した。今後も、老朽化する施設・復元建造物を適切に修繕しながら安心安全の運営を実現するため、夏季イベントにおける荒天対策、危険樹木の計画的な予防伐採などを着実に進め、だれでもが楽しく学べる野外教育施設としての評価を高めていきたい。									

外部評価 評価結果		総括的な意見(総評)	
A: 目標を十分に達成し、成果を上げている		コロナ対策に追われた数年間を経過して、安定的な運営が可能となり、それが着実に実施されていることを高く評価したい。懸案であったボランティアに関しては、新しい仕組みを試行中であり、その成果に期待している。昨年までの懸案であった、収蔵建造物の大規模修理の件であるが、そのための仕組みの整備の取り組みが開始されているようで、その実現を期待したい。今まで、多様なイベントが実施され、それなりに効果的であったことが明らかであるが、担当者らが負担過剰にならないように、慎重に配慮されるように、期待している。	
A: 目標を十分に達成し、成果を上げている B: 目標を概ね達成している C: 目標を十分に達成しておらず、改善が必要である			

基本方針							令和7年度達成目標		成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）	
東京都写真美術館は、日本で唯一の写真と映像を専門とする総合美術館として、写真・映像に関する文化の振興に寄与するため、平成7年1月に恵比寿ガーデンプレイスに開館いたしました。 以降、当財団は、世界にも数少ない写真・映像の総合美術館の運営を担う団体として、「写真・映像とは何か」という根本的な問いに答える展覧会プログラムを組み立て、記録としての写真・映像や、芸術としての写真・映像、報道としての写真・映像など、写真・映像が持つ多様な性格や表現により、如何に人々に豊かさや潤いを与えていけるかを追求してまいりました。 今後も、写真と映像のセンター的役割を担う美術館として「存在感」を高めていくことを基本コンセプトに、ホスピタリティーの高い館運営を行ってまいります。 以下は、基本コンセプトを支える5つの美術館像と、当財団として取り組む重点目標であり、写真美術館はこれらを実現するため、質の高い展覧会はもとより、専門性に裏打ちされた多様な事業を展開することにより、東京の代表的文化施設の一つとして貢献し、その存在感を国内外に示してまいります。 〈基本コンセプト〉 我が国唯一の写真・映像の総合美術館として、センター的役割を担う「存在感のある美術館」を目指します。 〈5つの美術館像〉 ① 質の高い写真・映像文化と出会う美術館 ② 写真・映像文化の新たな創造を支援する美術館 ③ 過去から現在に至る写真・映像文化を未来に継承する美術館 ④ 写真・映像文化の拠点として貢献する美術館 ⑤ 開かれた美術館 館の運営に当たっては、館の基本コンセプトである「存在感のある美術館」とこれを支える5つの美術館像を目指すとともに、財団総体で取り組む3つの重点目標を達成するため、右の目標を設定し、毎年、進捗状況を管理しながら事業を進めてまいります。 とりわけ、写真・映像に係る技術の進展や、それに伴う社会生活や価値観の変化、新たな表現など、時代の動向を具に捉えながら事業展開に努めます。また、国内外に写真・映像の館の存在感を示すため、写真・映像を専門とする総合美術館としてこれまで培った専門性を発揮し、質を重視した展覧会を実施するとともに、保有する国内外の美術館や国際交流基金等のネットワークを活かした共同企画、SNS等の効果的な情報ツールを積極的に活用した戦略的広報を推進してまいります。							『質の高い写真・映像と出会う美術館』にふさわしい展覧会の実施		○収蔵展、自主企画展、映像祭、誘致展を組合わせ、分野横断的な幅広いテーマの展覧会を15本開催した。 ○30周年の機会を最大限に活かし、国際的に評価が高い大規模海外作家個展を2本他、日頃の調査研究を質の高い展覧会や関連事業へ活かしながら、館の存在感を高めた。	
							評価指標	展覧会満足度、初めての来館者数	収蔵展・自主企画展 来館者満足度平均87.5%、初めての来館者数平均38.7%、会期中図録購買率最高14%（ルイジ・ギッリ展6,798冊）	
							『作品制作・発表と交流の場の創造支援』		○日本の新進作家展、恵比寿映像祭等を通じて、写真・映像表現における新進作家の作品を紹介し、関連事業への出講等により作家・作品と来館者を結び取り組みにつとめ、写真美術館発のアーティストの発掘、作品の収集を行った。 ○恵比寿映像祭「コミッション・プロジェクト」第2回特別賞作家展示を行い、第3回ファイナリスト4作家を選出・発表した。	
							評価指標	新進作家展や映像祭等での新進・中堅作家の登用と収蔵数、関連事業の参加者数	○「鷹野隆大」展グラフィックデザイン 北川一成がADC2025グランプリ受賞。 ○「TOPコレクション 作家の現在」展出品の志賀理江子が第一回梅原猛 人類哲学賞受賞。 ○「日本の新進作家展vol.22」展出品の寺田健人がVOCA奨励賞を受賞。 ○誘致展「被爆80年企画展ヒロシマ1945」展が2026年日本写真協会 学芸賞受賞。 ○新進作家作品の収蔵（4作家27点） ○恵比寿映像祭2026 配信動画取材5件 再生回数7,118回	
							『写真・映像文化の礎となる収蔵コレクションの充実・発信』		○収集方針、収集の新指針に基づき的確に作品を収集し、主催する展覧会等で早期の公開を図った。また、資料情報システムの充実を図り、収蔵品データの登録・公開につとめた ○令和7年度新規公開データ テキストのみ7,069件（R6実績3,146件）、画像875件（R6実績4,883件） 公開点数46,921件（R6実績39,852件）（うち画像付きデータ32,078件、R6実績31,203件）	
							評価指標	収蔵品の活用件数、デジタルアーカイブのアクセス件数、館外への作品・画像貸出実績	○令和7年度 資料情報システムアクセス件数 訪問数1,249,124件（R6実績267,501件） 閲覧履歴5,683,029pv（R6実績2,668,165pv）	
							『国内外の写真・映像に関する美術館等との連携』		○「ギッリ」展、「コスタ」展で大使館から助成を受け、内容を充実。「ギッリ」展ではイタリア文化会館東京の協力で共催シンポジウムを開催し、展覧会初日開催により広報効果にもつながった。また、韓国・ハンミ美術館に同展が巡回した。 ○映像祭では、ブリティッシュ・カウンシルの助成でモーガン・クウェインタンス、在日オーストラリア大使館の協力でアンジェリカ・メシティ、台湾文化センターの後援でチャン・エンマンの展示・上映を実現。 ○国内外ゲストと多角的に写真・映像を議論し、要旨を和英でウェブにアーカイブ化したことで専門美術館としての存在感を示した。	
							評価指標	国内外の文化施設や研究機関との共同企画や巡回展の実施件数、専門的会議への参画などの件数及び成果	○「ギッリ」展巡回（韓国・ハンミ美術館） ○ニューヨーク近代美術館の写真部門のキュレーターをはじめ、国内外のゲストを招き、総合開館30周年記念トークセッション（計8回）を開催。	
							『芸術文化へのアクセシビリティを向上させる環境整備の推進』		前年度に続き、視覚障害者と共に作品鑑賞するワークショップを実施し、手話による展示解説動画や「やさしい見どころガイド」を制作した。さらに耳の聞こえない鑑賞案内人を迎えての「手話を交えたQ&Aショー」「筆談鑑賞会」や、鑑賞体験を体で表現する「ダンス・ウェル」を新たに実施。ウェブアクセシビリティ対応や触地図の刷新、イベントの情報保障付与、アテンドボランティアによる「オール・ウェルカム・デー」も行い、鑑賞環境を充実させた。	
							評価指標	さまざまな人に配慮した事業の認知度、満足度	インクルーシブなプログラム実施18件／208人、参加者満足度97%、オール・ウェルカム・デー実施10回／のべ21人、ボランティア活動参加人数のべ488人、スクールプログラム実施31回／457人（内特別支援学校受入4件／90人）、NPO・その他教育機関等との連携3件	
							『展覧会等の観覧者数の確保』		○基幹的事業の柱となる収蔵展・自主企画展では、目標値に対し、収蔵展は94.8%、自主企画展では136.8%となり、特に自主企画展は多くの来館者を集め、事業の高い訴求力を示した。ギャラリートークやワークショップ等で内容理解を深める機会を創出すると共に、SNSを活用した広報等、多角的な展開により、年間観覧者数目標を達成する407,846人の来場者数となった。	
							評価指標	年間観覧者	参考目標値：380,000人 実績：407,846人（107.3%） 【内訳】展覧会392,054人、上映事業等15,792人	
							7	評価指標		
							8	評価指標		
総合的な所見（自己評価の総評）										
【総合開館30周年事業の実施】長年培った国内外関係者との連携、研究を活かした記念展、記念トークセッションを実施し、これまでの30年を振り返り、新たな課題を継続検討できるようアーカイブを作成した。 【質の高い展覧会事業の実施】日頃の調査研究に立脚し、国際的評価が高い国内外の作家個展や、多彩な切口で質の高い展覧会を開催した。現代社会の課題に向き合う若手作家の制作創出の場として、「日本の新進作家」展や映像祭コミッション・プロジェクトを継続実施。国際動向を見据えたテーマで恵比寿映像祭を開催し、地域連携も拡大した結果、映像祭史上最大の来場者数となった。 【アクセシビリティ向上】国籍や障害の有無に関わらず、あらゆる人々が享受できるプログラムを実施した。手話通訳、文字支援等の機会を拡大し、より一層幅広い事業展開を行うとともに、恵比寿映像祭では子供から高齢者、障害のある方、外国ルーツの方等が楽しめる多様なサポートやプログラムを実施。耳の聞こえない鑑賞案内人による「Q&Aショー」を参画プログラムとして開催し好評を得た。 【安定した運営への工夫】社会情勢が不安定ななか、支援会員数を増やす、大使館の助成金、協賛金を獲得する等、安定した運営を目指し、さまざまな工夫を実現した。上記1～6の目標に対して十分な成果をあげることができたと考えるが、さらに充実させる工夫を継続したい。										

外部評価 評定結果		総括的な意見（総評）	
A		・全体として高い評価となった。 ・令和7年度の観覧者数は、基準値38万人を大きく上回り、40万人を超える実績となった。 ・収蔵展は、収蔵作品を活用して独自の視点で企画された展示が、集客に成功し、若い学芸員の成長の場としても機能している。自主企画展は、内容、観覧者数ともに、素晴らしい結果を残した。恵比寿映像祭は、展示の拡充のみならず、地域的な拡張、都立美術館・博物館との連携、教育・普及プログラムの拡充など、年々多角的な拡大を実現させている。誘致展は、来館者の多岐にわたるニーズに対応した幅広いジャンルの展覧会を誘致し、初来観者の入口として機能した。 ・作品資料の収集・管理は、実施方針に基づき、収蔵作品が適切に保存されると同時にデータベース化され、展示や貸出を通じて積極的に活用されている。作品資料情報システムは、画像付き情報のアップロードが進み、情報システムからの流入が増え、所蔵品の貸出機会の増加に繋がっている。 ・地域連携は、恵比寿映像祭の発展や自主企画展の成功が、地域コミュニティの活性化に寄与している。 ・アクセシビリティの向上は、組織的・継続的に取り組まれており、多岐にわたる要望に対応可能となっている。	
A：目標を十分に達成し、成果を上げている B：目標を概ね達成している C：目標を十分に達成しておらず、改善が必要である			

令和7年度目標達成シート

基本方針							令和7年度達成目標		成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）																																					
・文化の創造と魅力あるメッセージの発信 ① 現代美術の国内外への発信 ② 現代美術の保存と継承（コレクションの充実・保全・公開） ③ 広範な関心への応答 ・現代美術の普及と次世代の担い手を育む ④ 優れた作品等の鑑賞機会の提供 ⑤ 現代美術の普及と子供達の育成 ⑥ 新進・若手作家をはじめとする文化の担い手への支援 ・あらゆる鑑賞者に開かれた美術館の実現 ⑦ アクセシビリティの整備 ⑧ 地域連携の強化							1	■総合美術館として、調査研究／展示／教育普及等、貴重な美術資料を様々な形で提供するとともに、魅力溢れる最先端の現代美術の表現を国内外へ広く発信する。 ■国内外の人々、特に次代の芸術文化の担い手である子供や青少年に、優れた鑑賞機会を積極的かつ効果的に提供する。 ■事業を通じて国内外のネットワークを拡大し、発信力の強化に取り組む。	■毎日芸術賞や芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した「岡崎乾二郎展」、国際的に高い評価を得るミドルキャリア作家「笹本晃展」など、内容面では極めて高い専門的評価を得た。一方で、ライト層への効果的な訴求に課題が残り、年間定量目標の達成には至らなかった。 ■国内外の諸機関とのネットワークを強固に構築し、国際的な組織、作家、キュレーターとの活発な交流を促進した。これらの連携は、諸機関との国際共同企画「MOTplus」へつながる有益な成果となった。																																					
							評価指標	年間観覧者数、来館者満足度		年間観覧者数398,392人（コレクション展124,898人、企画展273,494人）																																				
							2	■収蔵作品・資料等の充実・活用を通じ、「現代」と体系的な美術の歴史とを結びながら、総合美術館として現代美術の普及と振興に努める。 ■専門家との協働や最新の調査研究の成果に基づいた着実な管理（保存・修復・展示）によって、貴重な作品を未来へ伝える。 ■コレクションの活用、他美術館・博物館への貸出協力を行うとともに、海外での東京都コレクション展の開催など、財団他施設との連携で開催する。	■開館30周年の企画として、1935年から10年ごとを学芸員の独自の視点で紹介した企画や新規収蔵作品の公開を行い、また作家との協働や、作品借用により既存のコレクションの魅力をより多角的に発信する展示を実現した。 ■専門家と協働しながら20点の修復、国内外の美術館等へ38件・177点の作品貸出を実施した。 ■コレクション検索サイトを活用し、画像とともに展示中や貸出中の作品情報を発信した。（年間PV5.2億P超／1日144万P超）																																					
							評価指標	収蔵品のデジタル撮影点数、新収蔵作品のデジタルデータの入力件数		収蔵作品のデジタル撮影219カット／新収蔵作品のデジタル入力 146件																																				
<table><tr><th></th><th>R4年度実績値</th><th>R5年度実績値</th><th>R6年度実績値</th><th>R7年度基準値</th><th>R7年度実績値</th></tr><tr><td>観覧者数（人）</td><td>463,723</td><td>664,845</td><td>758,006</td><td>430,000</td><td>398,392</td></tr><tr><td>自主事業参加者数（人）</td><td>28,307</td><td>54,663</td><td>33,927</td><td></td><td>45,833</td></tr><tr><td>若手作家の支援（人）</td><td>13</td><td>13</td><td>8</td><td></td><td>19</td></tr><tr><td>協賛金の獲得金額（千円）</td><td>10,000</td><td>4,039</td><td>6,423</td><td></td><td>7,225</td></tr><tr><td>HPのアクセス件数</td><td>9,160,852</td><td>10,091,451</td><td>9,429,463</td><td></td><td>5,400,666</td></tr></table>								R4年度実績値	R5年度実績値	R6年度実績値	R7年度基準値	R7年度実績値	観覧者数（人）	463,723	664,845	758,006	430,000	398,392	自主事業参加者数（人）	28,307	54,663	33,927		45,833	若手作家の支援（人）	13	13	8		19	協賛金の獲得金額（千円）	10,000	4,039	6,423		7,225	HPのアクセス件数	9,160,852	10,091,451	9,429,463		5,400,666	3	■現代社会の広範な関心に対応し、東京の社会課題に美術をとおして向き合う場となることを目指す。 ■最先端の情報の収集と堅実な調査・研究に基づいたプログラムの提供により、来館者に「知る喜び」を伝える。 ■デザイン、ファッション、建築、音楽、映像、アニメーションなど、他ジャンルを幅広く取り上げることで多様な関心に応える。 ■上記事業全体をとおして、財団内連携によるクリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョーに参画する。	■日本を代表する作家個展、多様な人々が集う社会で現代美術の拠点として独創的な役割を果たすグループ展、躍進著しいミドルキャリアの個展、そして20世紀後半の美術界に革命を起こしたアメリカの巨匠の個展など、現代の表現を享受する場を創出できた。 ■「日常のコレオ」展では、車いす利用当事者がアクセシビリティコンサルティングとして参画し、展示設計やプログラム、職員対応に助言を行うとともに、触図設置や鑑賞プログラムの実施につなげ、運営の充実と職員対応力の向上を図った。 ■エントランスホールでのアクセシビリティ情報発信、誘導スタッフ配置による対応体制の整備を行うとともに、貸出ツールを導入し鑑賞支援の選択肢を拡充した。	
								R4年度実績値	R5年度実績値	R6年度実績値	R7年度基準値	R7年度実績値																																		
							観覧者数（人）	463,723	664,845	758,006	430,000	398,392																																		
							自主事業参加者数（人）	28,307	54,663	33,927		45,833																																		
若手作家の支援（人）	13	13	8		19																																									
協賛金の獲得金額（千円）	10,000	4,039	6,423		7,225																																									
HPのアクセス件数	9,160,852	10,091,451	9,429,463		5,400,666																																									
評価指標	クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー事業の件数、参加者数		エントランスホールでの対応24,905人 ツール貸出99件																																											
4	■先端的表現／展示手法により国内外の現代美術を紹介し、ファッション、映像等、様々なジャンルを幅広く取り上げることで新たな客層を獲得する。 ■収蔵作品、資料等の充実・活用を通じて、「現代」と体系的な美術の歴史とを結びながら、優れた鑑賞機会を提供する。	■日本を代表する造形作家の活動を包括的に示す個展をはじめ、現代美術の拠点として独創的な役割を果たすグループ展、躍進著しいミドルキャリア作家の個展、さらに20世紀後半の美術界に革命を起こしたアメリカの巨匠の個展など、現代の表現を享受する場を多角的に創出した。 ■展覧会ごとに異なる共催・協賛・協力の枠組みにおいて、各関係機関や作家との綿密な協議を重ね、諸課題を解決することで、全事業を安全かつ円滑に実施した。 ■約6,000点の収蔵作品を核として、年間3期にわたり多様な切り口によるテーマ性豊かなコレクション展を開催した。																																												
評価指標	コレクション展示の出品・公開点数		コレクション展における収蔵作品公開 433点																																											
5	■収蔵作家が現存する特性を活かした活動、体験型展示との連動など子供でも分かりやすい方法を工夫し、創造力・鑑賞力を高める教育普及活動を展開する。 ■アーティストによるワークショップや新たな情報デバイスの活用など、様々な体験をとおして、現代美術の普及に取り組む。 ■学校との連携や高齢者対象、障害があっても参加することができるプログラムなど、様々な年齢や興味に応じたきめ細やかな事業を展開する。	■小学校から大学まで、海外からの修学旅行生や地元高齢者関連施設のシニア層に加え、来館が困難な肢体不自由や入院中の子どもたちが在籍する特別支援学校とも関係を築き上げ、オンラインを含めた鑑賞や創作の機会を創出した。多様な対象に対して丁寧に対応することで、新たな鑑賞機会と鑑賞者層の拡大につなげた。 ■開館30周年を記念した特別企画として、学校向けの人気プログラム「アーティストの一日学校訪問」を一般の方にも参加いただけるワークショップとして実施。参加者数を拡大し、多くの方に参加いただける機会を創出し、高い満足度を得た。																																												
評価指標	教育普及プログラムの参加者数及び満足度		教育普及プログラム参加者 7,247名 満足度96%																																											
6	■才能ある芸術家の発掘・支援のため、新しい創造活動や作品発表の機会提供や作品の収蔵などを行う。 ■学校をはじめ、国内外機関、地域企業やNPO等、様々な人々とのネットワークを形成し、事業の協業を通じて文化の担い手の裾野を広げる。	■コレクション展において、新規収蔵した若手作家の作品を借用作品も組み合わせながら積極的に公開・展示することで、次世代を担う作家の活動を支援し、その評価を確立させる機会を創出した。 ■「日常のコレオ展」では、国内未発表の海外作家7名（組）を紹介するとともに、12組の作家による新作制作を支援した。本展を契機として、参加作家が海外での展示機会を獲得するなど、国際的なキャリア形成を後押しする役割を果たした。 ■学生無料デーや夜間開館																																												
評価指標	若手作家への支援数（作品公開・展示・収集等）、インターン受入れ		若手作家への支援 作品公開32点／展覧会における作家6名／収集13名・39点																																											
7	■設備面のみならず、手話通訳の導入や普及プログラムの提供などソフト面でのバリアフリーを促進する。 ■総合的な視点から、多言語化を含め、誰もが現代美術を享受できる場を作る。 ■おむつ替えスペースの設置やベビーカーの無料貸出等、小さなお子様連れでも安心して美術館での鑑賞を楽しむことができる環境を整える。 ■スマートフォンやタブレット端末を用いて、インターネット経由での展覧会の鑑賞の他、より現代美術に親しみやすい環境を整える。	■関連プログラムへの手話通訳の配置や触察ツール、貸出ツールの活用により多様な来館者に向けたアクセシビリティ向上に取り組む、鑑賞機会を拡充した。 ■子ども連れでも安心して利用できる環境整備に加え、託児サービスを実施し、お子様連れの来館者のニーズに対応した。 ■特別支援学校向けオンラインスクールプログラムや、コレクション作品へのUni-Voice、手話・音声ガイド付き動画の制作等を通じ、オンラインを活用した鑑賞機会を整備し、来館困難層への普及を図った。																																												
評価指標	バリアフリーに関する取り組みの件数、アンケート、満足度調査による満足度、未就学児の割合		・聴覚障害向けプログラム10 回・視覚障害向けプログラム等18件・やさしい日本語版パンフレット約4000枚配布・託児サービス実施17日101人満足度99%																																											
8	■近隣施設や商店街等と連携し、地域における街づくりの核となることで、伝統と現代が共存・融合する都市・東京のイメージをアピールする。 ■地域との密なコミュニケーションを図り、誰もが文化に触れられ、参加できる親しみやすい施設づくりを目指す。 ■地域と連携した事業を積極的に実施し、地域経済の活性化と観光拠点の役割を果たすとともに、災害時には関係機関への協力を適切に行う。	■東京アートブックフェアではソル・ルウィット展に先駆けアーティスト・ブックに関わるトークイベントや、館主催のレクチャーパフォーマンスを実施、来場者に向けた多彩なコンテンツを提供した。 ■区民まつりや町内清掃への参加、イベントへの協力など地元区、町会、商店街等と積極的に連携した。館と地域が連携を深めることで、伝統と現代が同居する清澄白河地域の発展に寄与している。																																												
評価指標	地域連携活動の実践		【江東区】① 江東区民まつりへの参加②スタンプラリーへの協力【地元町会（三好4丁目）】③ 毎月一斉清掃への参加④ イベントへの協力【地元商店街】かかしコンクールへの協力、商店街バナーの掲出【東京アートブックフェアでの地域連携】近隣施設、イベントを紹介した「NEIGHBOURS（ネイバーズ）」エリアマップ作成【30周年記念】記念コラボ商品（オリジナルドリッパコーヒー）の開発・販売																																											
総合的な所見（自己評価の総評）																																														
・開館30周年の節目となる今年度のコレクション展では、90年にわたる美術史を10年ごとに区切った9つの展示室を辿る構成により、当館コレクションの重要性和魅力を幅広い来場者に提示することができた。一方、企画展においては、これからの30年を見通した課題や問題意識を、広く発信する大規模な国際グループ展を実現した。 ・日本を代表する造形作家の集大成となる個展、コンセプチュアル・アートの重要な先駆者による日本初の個展、国際的に活躍する中堅作家の大規模な初個展、国内外の研究・教育機関との連携による領域横断的なテーマ展など、多様なラインナップを実施し、質の高い展示で、当館のキュレーション能力を存分に示し、企画展を契機とした作家の「芸術選奨文部科学大臣賞」受賞などの評価とともに、現代美術のコアな愛好者層からの高い関心を獲得した。一方で、近年獲得してきたライトユーザー層への波及には課題が残り、年間来館者数は目標基準値の9割強に留まった。今後は、企画の質を落とすことなく、あわせて幅広い層がより親しみやすいアプローチも意識的にとりいれる必要がある。回を重ねてきたアートブックフェアは2期計7日間の実施に拡大、新たに始動したMOT Plusでは館外組織との協業を活かした展示を実現し、ともに新規層の集客にも寄与した。 ・館の活動の重要な柱の一つである教育普及事業では、全世代を対象とした「普及プログラム」に加え、学校教育と連携した「スクールプログラム」を積極的に展開した。「アーティストの一日学校訪問」では、2007年度以来となる島しょ地域（八丈島）での開催を実現すると共に、肢体不自由や院内学級などの特別支援学校にも丁寧に対応をするなど、手が行き届きにくい層に対して鑑賞機会を創出した。また、手話通訳や補聴援助システムの導入により、あらゆる鑑賞者に開かれた美術館を目指す取組を推進した。 ・若い鑑賞者の育成を目的とし、中学生のコレクション展観覧料無料化や、独自の「学生無料デー」の実施、SNSでの情報発信強化に注力した。地域連携においては、地元のイベント協力や清掃活動への参加を通じ、清澄白河エリアの発展とコミュニティの活性化に寄与した。																																														
外部評価 評価結果					総括的な意見（総評）																																									
A: 目標を十分に達成し、成果を上げている					○昨今美術館は、展覧会や教育普及活動、資料収集などの質的な評価と、入場者数、チケット収入、協賛金額など量的な評価の両方が求められてる。現代美術館は、性質の異なる質的、量的目標をうまくバランスをとりながら達成しており、短期で結果を求めず、成果を繋いで循環を生み出す仕組みを館全体で構築している。展覧会の企画・キュレーションの幅の広さ、展示にとどまらない多様な活動が展開され、これらを支える組織力も充実し、現代アートの専門館として独自性が際立っており、高く評価する。 ○コレクション展、教育普及活動の充実した実績を見て、生きる上で精神的ストレスを感じることが多い現代において、まさにその現代の目録で迫る内容の企画は、人々の共感や気付きを促し現代美術が人々の心に深く食い込んできていると感じる。日本でも現代の作家によるリアリティのある表現活動が、若い人たちにしっかりと受け入れられるようになってきたことを実感している。 ○東京都現代美術館のコレクション展は、特に戦後美術に特化しているという意味でも、唯一無二の存在である。それゆえ、個別の展覧会やイベントだけではなく、美術館自体のPRとイメージ戦略が今後より重要になってくるだろう。 ○近年コレクション展の企画がきわめて充実している。依然として欧米中心主義が色濃く残る現代美術の世界において、欧米の戦後美術と並走しつつも独自の展開を示してきた日本の戦後美術史を芸術だけではなくその時代の政治や社会、経済や関連領域の文化との関連の中で示してきたコレクション展に対しては海外からの評価も高く、日本現代美術に対する近年の国際的な評価の高まりに対してひときわ大きく貢献している。 ○教育普及プログラムが年々多様化している点は発展的と評価され、明確な指標設定のもとに、手堅い運営がなされている点も評価される。自転車操業や単なる繰り返しに陥らないよう、十分な振り返りの時間が確保され、組織運営において部署横断的で合理的な組織運営を目指してほしい。 ○年間観覧者数が、基準値に達しなかったということだが、社会的現象にまでなった展覧会を立て続けに企画したR5、R6が例外的な年であり、今年の状況の方をむしろ基準にして考えるべきだろう。特に観客の安全性の確保を常に中心にして、来場者や都民、住民に対するケアを忘れず、美術館の運営スタッフがオーバーワークにならないような持続的で安定した運営を目指して欲しい。																																									
A: 目標を十分に達成し、成果を上げている B: 目標を概ね達成している C: 目標を十分に達成しておらず、改善が必要である																																														

基本方針						令和7年度達成目標		成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）																										
東京都美術館は、展覧会を鑑賞する、子供たちが訪れる、芸術家の卵が初めて出品する、障害のある方が何のためらいもなく来館できる、すべての人に開かれた「アートへの入口」となることを目指します。 新しい価値観に触れ、自己を見つめ、世界との絆が深まる「創造と共生の場＝アート・コミュニティ」を築き、「生きる糧としてのアート」と出会う場とします。そして、人々の「心のゆたかさの拠り所」となることを目指して活動していきます。 来る開館100周年（令和8年）を機に、芸術文化による社会包摂と心身の健康と幸福を目指し、新しい美術館モデルを切り拓いていきます。 そのため、美術館の運営にあたって4つの役割を掲げます。 1「世界と日本の名品に出会える美術館」 2「伝統を重視し、新しい息吹との融合を促す美術館」 3「人々の交流の場となり、新しい価値観を生み出す美術館」 4「芸術活動を活性化させ、鑑賞の体験を深める美術館」						1	「アートへの入口として「創造と共生の場」を形成する」		昨年度から財団全体で推し進めている芸術文化へのアクセシビリティの向上・施設の環境整備について、今年度も積極的に取り組んだ。土日の手話通訳対応スタッフ設置に加え、平日・祝日も障害全般に対応できる受付スタッフを設置。障害のある来館者を想定した防災ツールの開発、視覚障害のある方の避難を前提とした防災訓練を実施した。アート・コミュニケーション事業では、「とびらプロジェクト」「Museum Start あいうえの」「Creative aging ずっとび」において、引き続き、活発な活動を継続すると共に、夏季期間に公募展示棟LB第3公募展示室でAC事業を一般に分かりやすく紹介する「アート・コミュニケーション事業を体験する2025」を開催。都が新たに進めることとした「ネクストクリエイション事業」をAC事業の中で取り組むこととし、ろう者、難聴者、聴者がアートコミュニケータとともに作品を鑑賞し、対話・体験を通じて「つながり」を深めるプログラム「みるラボ」を実施した。また、オールウェルカムTOKYOの取組の一環として、「やさしい日本語プログラム」を実施し、施策の成功に貢献した。特別展では、日時指定制をオプションとし、安全第一の運営を実施。「ゴッホ展 家族がつないだ画家の夢」では、コロナ禍以降初めての52万人を超える動員があったが、大きな混乱なく終了することができた。広報では、館内配布用の案内リーフレット（日本語、英語、韓国語、中国語/2種）のデザインを一新。多言語での適切な情報の提供に努めるとともに、各現場において、日々来館者への丁寧な対応に務めた。																									
							評価指標	ICTを活用したアートコミュニティ形成に関わる事業…とびラボ開催回数（延べ） 間口を広げ、市民が主体的に関わる仕組みづくり…アート・コミュニケーション事業のプログラム回数																										
この基本方針のもとに4つの事業を展開します。 ① 展覧会事業＝特別展や企画展など、見る喜び、知る楽しさを提供する。 ② 公募展事業＝公募団体やグループと連携し、つくる喜びを共有する。 ③ アート・コミュニケーション事業＝アート・コミュニティ形成による新たな可能性を探求する。 ④ アメニティ事業＝アトラウンジや美術情報室、ミュージアムショップ、レストラン等、訪れる楽しさを充実させる。						2	「世界と日本の名品に出会える美術館である」		特別展「ミロ展」を引き続き開催。「ゴッホ展 家族がつないだ画家の夢」では、コロナ禍以降最高（52.7万人）の動員となったものの、誘導スタッフとの日々の緊密な連携により、大きな混乱なく終了することができた。「スウェーデン絵画 北欧の光、日常のかがやき」では、親密な雰囲気醸し出す、丁寧な展示構成が好意的な評価となって、日々の着実な動員につながった。次年度以降の展覧会の準備では、各種開館100周年記念展の準備を含め、着実に実施した。																									
							評価指標	年間特別展観覧者数（人）																										
<table><tr><th></th><th>R4年度 実績値</th><th>R5年度 実績値</th><th>R6年度 実績値</th><th>R7年度 基準値</th><th>R7年度 実績値</th></tr><tr><td>特別展観覧者数（人）</td><td>643,683</td><td>921,379</td><td>616,349</td><td>700,000</td><td>865,029</td></tr><tr><td>自主企画展観覧者数（人）</td><td>88,761</td><td>60,378</td><td>59,964</td><td></td><td>95,114</td></tr><tr><td>公募展示室割当時稼働率</td><td>98.2</td><td>96.5</td><td>94.8</td><td>100</td><td>94.8</td></tr></table> ※R7年度基準値は提案書の基準値 ※自主企画展観覧者数は企画展＋AP展。受託であるコレクション展の人数は除く。							R4年度 実績値	R5年度 実績値	R6年度 実績値	R7年度 基準値	R7年度 実績値	特別展観覧者数（人）	643,683	921,379	616,349	700,000	865,029	自主企画展観覧者数（人）	88,761	60,378	59,964		95,114	公募展示室割当時稼働率	98.2	96.5	94.8	100	94.8	3	「新たな価値や可能性を見出す展覧会等を実現する」		「つくるよろこび 生きるためのDIY」は、その親しみやすい内容によって、個々の成果指標の中で、図録の販売以外ほぼ達成することができた。ファシリテータによる対面の鑑賞サポートの実施により、鑑賞者の能動的な創作意欲や内発的な気持ちを喚起することができた。「コレクション展」では、東京都コレクションを有効に活用、広く関心を喚起させることができた。	
							R4年度 実績値	R5年度 実績値	R6年度 実績値	R7年度 基準値	R7年度 実績値																							
特別展観覧者数（人）	643,683	921,379	616,349	700,000	865,029																													
自主企画展観覧者数（人）	88,761	60,378	59,964		95,114																													
公募展示室割当時稼働率	98.2	96.5	94.8	100	94.8																													
評価指標	企画展とコレクション展の入場者数（人）																																	
<table><tr><th></th><th>R4年度 実績値</th><th>R5年度 実績値</th><th>R6年度 実績値</th><th>R7年度 基準値</th><th>R7年度 実績値</th></tr><tr><td>特別展観覧者数（人）</td><td>643,683</td><td>921,379</td><td>616,349</td><td>700,000</td><td>865,029</td></tr><tr><td>自主企画展観覧者数（人）</td><td>88,761</td><td>60,378</td><td>59,964</td><td></td><td>95,114</td></tr><tr><td>公募展示室割当時稼働率</td><td>98.2</td><td>96.5</td><td>94.8</td><td>100</td><td>94.8</td></tr></table> ※R7年度基準値は提案書の基準値 ※自主企画展観覧者数は企画展＋AP展。受託であるコレクション展の人数は除く。							R4年度 実績値	R5年度 実績値	R6年度 実績値	R7年度 基準値	R7年度 実績値	特別展観覧者数（人）	643,683	921,379	616,349	700,000	865,029	自主企画展観覧者数（人）	88,761	60,378	59,964		95,114	公募展示室割当時稼働率	98.2	96.5	94.8	100	94.8	4	「作品発表の場の提供と新たな創造性を共有する美術館である」		学校教育展、公募団体展を滞りなく実施。令和9年度以降の使用割当を着実に実施した。「上野アーティストプロジェクト2025 刺繍―針がすくいだす世界」展は、同企画展枠で最大の動員を達成。図録も完売し、手工芸に関心のある方を中心に広い層へその魅力が届くことに成功した。「都美セレクション グループ展 2025」では、現代美術の動向を反映する3つの企画を実施した。	
							R4年度 実績値	R5年度 実績値	R6年度 実績値	R7年度 基準値	R7年度 実績値																							
特別展観覧者数（人）	643,683	921,379	616,349	700,000	865,029																													
自主企画展観覧者数（人）	88,761	60,378	59,964		95,114																													
公募展示室割当時稼働率	98.2	96.5	94.8	100	94.8																													
評価指標	公募展示室使用割当時稼働率（％）																																	
「アートを介して多様なコミュニティの形成を行い、社会課題の解決に取り組む」 アート・コミュニケーション事業では「とびらプロジェクト」「Museum Start あいうえの」そして教育普及活動を着実に実施するとともに、「Creative Ageing ずっとび」を事業計画に沿って確実に推進する。「ずっとび」では高齢者や障害者と文化施設をつなぐ仕組みづくりに向けて調査・研究を行い、引き続きプログラムを着実に実施する。						5	「アートを介して多様なコミュニティの形成を行い、社会課題の解決に取り組む」		「とびらプロジェクト」「Museum Start あいうえの」「Creative ageing ずっとび」において、引続き活発な活動を続けた。「Creative Ageing ずっとび」では、初期認知症の高齢者とその家族とアート・コミュニケータとが東京藝術大学美術館で鑑賞するプログラムを台東区の医療・福祉機関そして大学美術館と連携し、対話型鑑賞のプログラムを実施した。																									
							評価指標	「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー」に取り組む…（「ずっとびプログラム」を2種実施、7月～8月に公募棟で「アート・コミュニケーション事業を体験する2025」を開催）（プログラム実施回数）																										
「様々な主体とのネットワークを強化しながら上野地域の文化施設の中で中核的な役割を果たす」 上野周辺地域の文化および商業施設とのネットワークを強化することにより、地域の魅力を高めることを目指す。顕在化していない地域の様々な文化資源も含め、横断的にそれらをつなぐアート・コミュニケーション事業の実施や、地域連携による着実に積極的な広報活動を行う。						6	「様々な主体とのネットワークを強化しながら上野地域の文化施設の中で中核的な役割を果たす」		年間を通じて、「チケ得」（当館観覧券半券での、商業施設での特典）を実施の他、商店街でのペナント掲出（特別展、企画展）、「つくるよろこび 生きるためのDIY」では、エキュート、アトレ、丸井、松坂屋で割引券付きのステッカー配布、「ジュエリータウンおかちまち」（御徒町の商店街）では、DIY展の割引券付ポストカード配布を実施した。																									
							評価指標	上野周辺地域の文化および商業施設との連携																										
総合的な所見（自己評価の総評）																																		
「ミロ展」は、良質な回顧展として高い満足度を達成。「ゴッホ展 家族がつないだ画家の夢」では、作家顕彰の歴史を「家族」をキーワードに丹念に紹介。コロナ禍以降初めての動員50万人を達成した。「つくるよろこび 生きるためのDIY」展では、ファシリテータによる対面の鑑賞サポートにより、鑑賞者の能動的な創作意欲を喚起させることができた。「上野アーティストプロジェクト2025 刺繍―針がすくいだす世界」展は、同展枠過去最大の動員を達成。図録も完売した。「コレクション展 刺繍がうまれるとき―東京都コレクションにみる日本近現代の糸と針と布による造形」は、刺繍展と連動し、歴史的背景を丁寧に解説、大きな関心を喚起させた。「都美セレクション グループ展2025」では、現代美術の動向を反映する3つの企画を実施。アート・コミュニケーション事業では、「とびらプロジェクト」「Museum Start あいうえの」「Creative Ageingずっとび」を引続き展開。「Creative Ageingずっとび」では、初期認知症の高齢者と家族を対象に鑑賞プログラムを台東区の医療・福祉機関と連携して実施した。公募展示室では「みること、つくること、つながること」をキーワードに、三組の作家の展示と共に、AC事業を紹介する「アート・コミュニケーション事業を体験する2025」を実施。上野公園の文化施設の連携を継続しながら、上野の商業施設との連携広報を適宜行った。以上のとおり令和7年度は、特別展、企画展、コレクション展などの多彩な展覧会を始め、AC事業の各種の取組を例年以上に精力的に展開するとともに、公募展事業では、見直しを図りながら着実に運営を進めた。また、ネクストクリエイション事業、オールウェルカム TOKYOなどの都が推し進める施策にも積極的に取り組み、都の政策実現に貢献。これらの結果、来館者数は1年ぶりに200万人を超えることとなった。																																		

外部評価 評価結果		総合的な意見（総評）	
A		開館100周年への助走を思わせるような1年となった。 特別展・企画展については、多彩なラインナップのもと、いずれもよく練られた質の高い展示構成であった。全企画が来場者が自らの目と心で作品を見、美術をまたその基準を問い直し、その様に生を世界を新鮮に体験しなおそうと見たり考えたりあるいは作り出したいと願うようにするという点で優れ、成功していた。「ミロ展」は目標動員数を割り込んだものの、国内最大かつ包括的な回顧展を実現し、ミロの日本及び20世紀美術について新鮮な理解をもたらした。「ゴッホ展」は遺族達により遺作の管理収集や美術館等への提供などが深い理解と敬愛に基づいて粘り強くおこなわれたことを通して、ゴッホ作品並びにそれに連なる新美術の評価創出に貢献したといったテーマ性をもたせた好企画であり、予想を上回る来場者となった。「スウェーデン展」は馴染み薄かったスウェーデンの近代絵画の概容に系統的に触れる貴重な機会を提供し、日本の季節感との相性もよく、落ち着いた北欧の日常を感じる機会ともなった。「DIY展」は、アーティストや建築集団たちの仕事からなる観衆参加的展示であり、作家との対話により楽しい鑑賞機会となった。「上野AP（刺繍）展」は刺繍のイメージを超えた様々な表現が紹介され見ごたえのある内容であった。「コレクション展」は、「刺繍展」とリンクし、刺繍が近代日本の中でどのような産業・社会・文化的・ジェンダー的等の意味を持って生まれ展開されていったのかを貴重な資料によって物語るものとなったが、歴史的考察を深める優れた内容であるだけに、ディスプレイの洗練が加わると、なお展示の魅力が増したのではないかと。アートコミュニケーションにかかわる諸活動・事業は本年度も高い水準で膨大・多様且つその都度鮮度をもって展開された。従来からのプログラムに加えて、「ずっとび」の高齢者に向けた取組が目される。事業の先駆性、充実は突出しており、さらなる進化が期待される。アクセシビリティに関しては、担当者だけではなく館長以下嘱託職員まで館全員の意識が重要なので、アクセシビリティ研修を館スタッフほぼ全員で受講したことは素晴らしい。これらの基本的な取り組みを今後さらに充実させて、100周年となる令和8年にはさらに飛躍されることを期待する。	
	A: 目標を十分に達成し、成果を上げている B: 目標を概ね達成している C: 目標を十分に達成しておらず、改善が必要である	その他、その他今年度本館の諸業務・活動はいずれも熱意と創意をもって適正・適切に遂行されている。	

基本方針						令和7年度達成目標		成果と課題(評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応)			
1 歴史的建造物である本館の保存とその公開 2 装飾芸術に基づく新たな価値を今日の社会に活かす展覧会・各種事業の実施 3 「歴史的建造物」、「装飾芸術」、「庭園」を三本柱とする文化的都市空間の形成 4 あらゆる鑑賞者に開かれた美術館の実現 東京都庭園美術館は、本館が昭和8(1933)年に建築されたアール・デコ様式の歴史的建造物であることから、昭和58(1983)年の設立以来、その「保存」と「活用」を運営方針としてきました。 保存の面では、開館を期に本館の修復作業に着手し、また毎年、アール・デコ様式の調査研究を兼ねた「建物公開展」を開催してきました。その成果のひとつとして、本館は平成27(2015)年に、国の重要文化財「旧朝香宮邸」に指定されています。 活用の面では、アール・デコという言葉が、「装飾芸術」(建築、デザイン、工芸、家具、美術等に表れる装飾性)を意味するフランス語に由来することから、これまで国内外の美術作品を、主として装飾芸術の観点から取り上げる展覧会を企画してきました。 平成26(2014)年の新館改築を機に、館の運営方針には、「新たな価値の創造」が加えられました。これによって庭園美術館の展覧会事業には、今日の視点で装飾芸術を創造する芸術家の作品を展示することが加わりました。 このほかに東京の文化の魅力の創造と発信に寄与するために、装飾芸術の価値を今日の社会に生かすという視点から、庭園の活用事業をはじめとして、さまざまな教育普及事業にも取り組んでいきます。 以上の経緯により、庭園美術館は、重要文化財である「旧朝香宮邸」の保存と公開を基盤に、装飾芸術の力によって、東京という都市のこれからの課題である多文化共生、環境問題などに対応し、すべての都民の心を豊かにする場となることを目指していきます。						1	旧朝香宮邸の適正な維持管理及び調査研究 ・重要文化財に指定されている旧朝香宮邸本館・茶室及び緑あふれる庭園について、保存活用計画に基づき適切に維持管理するとともに、歴史的沿革や建築史・美術史的特徴などに関する調査研究を通してその価値を高めていきます。		今年度も継続して旧朝香宮邸関連の調査研究を実施した。年度内開催の建物公開展ではこれまで部分的にしか取り上げなかった迎賓館時代にも焦点を当て、歴史的沿革や建物の変遷について新たな知見を加えることができた。茶室についても外部研究者との連携により最新の研究成果を紀要にまとめることができた。		
							評価指標	旧朝香宮邸に関する調査研究の継続的实施、展覧会や紀要等を通して成果を公開		旧朝香宮邸についての最新の調査成果を建物公開展で紹介、紀要掲載論文4本	
						2	建物公開展の実施を通じた重要文化財「旧朝香宮邸」の価値の発信 ・旧朝香宮邸に関する調査研究の成果を反映した「建物公開展」を開催し、都民共有の貴重な文化遺産に親しみつつ後世に継承するための契機とします。		今年度の建物公開展は、旧朝香宮邸を「機能の変遷」の視点から多角的に取り上げ、これまであまり紹介していなかった戦後の公邸・迎賓館時代にもスポットを当てた。さらに「第二浴室」の新規公開や建物ツアー等の実施を通して、旧宮邸の新たな魅力創出と文化財としての価値の発信に努めた。		
							評価指標	建物公開展入館者数、満足度		建物公開展入館者数: 67,741人(対目標比169.4%)、満足度: 97.8%	
						3	装飾美術の観点から内容を選定した企画展覧会を開催し、優れた作品等の鑑賞機会を提供 ・アール・デコ様式の原点である「現代産業美術・装飾美術国際博覧会」(アール・デコ博)の開催100周年を記念する大規模国際展を開催し、当館の活動の根幹である装飾美術を分かりやすく紹介します。また、トークイベントやワークショップなどリアル参加型の事業を充実させ、当館ならではの鑑賞体験を提供します。		アール・デコ博覧会100周年を記念し、当館独自の企画展「永遠なる瞬間 ヴァン クリーフ&アーペル ― ハイジュエリーが語るアール・デコ」展を開催した。ヴァン クリーフ&アーペル社の全面的な協力の下、貴重な歴史的コレクションを中心に内容を構成し、展示空間も含めたトータルな会場構成とあいまって約127,000人の入場者を達成した。		
							評価指標	講演会やオンラインツアーなど関連事業の開催		ヴァン クリーフ&アーペル社との連携により、専門性の高い講演会を2回実施	
						4	建物や庭園などの文化資源を活用した教育普及等の事業の実施 ・本館に施された装飾をテーマとしたワークショップや、庭園・茶室を活用した各種イベント等の開催を通じ、文化財の価値や意義を楽しく理解できるよう工夫します。		建物の特性を活かした教育普及事業を複数実施し、好評を博した。建物に関するトークを3回実施し、壁紙の特徴や修理等に関する専門性の高い内容をもって参加者の期待に応えた。2回実施した建物ツアーでは、逆に平易な解説をもって親しみやすく文化財を学ぶことができるようにするなど、知的関心の程度に合わせたプログラムを提供することができた。		
							評価指標	建物や展覧会鑑賞用の独自ツールを活用した学校連携等の実施		美術館講座3回実施、建物トーク3回実施、建物ツアー2回実施、学校連携事業9校実施	
						5	ユニークな空間特性を生かし、豊かな文化的体験の場を提供 ・庭園や茶室を有する当館のユニークな環境特性を活かし、伝統文化を学ぶ若年層と在住外国人の日本理解の取組等を繋ぐイベントを開催し、多様な文化的価値を体感できる場を創出します。		今年度も当館の茶室「光華」を活用し、茶道を学ぶ高校生と各国大使館とを繋ぐ試み「光華倶楽部」を実施した。本企画は徐々に認知度が上がってきていて、参加を希望する高校は年々増えつつある一方、大阪万博の開催や国際情勢の変化等により、大使館側との調整に苦慮した。流動性が高い大使館側のスケジュール確保が今後の課題である。		
							評価指標	庭園や茶室を活用した若年層向けイベントの開催		光華倶楽部2回実施	
6	庭園を活用した地域連携事業の実施 ・近隣他施設や組織と連携し、庭園を活用した魅力的な事業を開催します。		当館の庭園を活用したイベントを各種開催し、さらなる魅力の創出に努めた。恒例となった庭園能に加え、活性化と地域連携を目的とした庭園マルシェを開催、地域の事業者による出店やワークショップを実施した。アール・デコ博覧会100周年を記念した「夜会」は、当館らしい企画として好評を博し、約3,400人の参加者があった。								
	評価指標	庭園を会場とする伝統芸能公演やガーデンコンサート等の実施		庭園能3公演実施、夜会1回実施、庭園マルシェ1回実施、ガーデンコンサート3回実施							
7	共生社会を志向する事業と施設管理 アクセシビリティプログラム&ダイバーシティプログラムの充実 ・共生社会の課題に対して美術の力で貢献できるよう、アクセスをためらいがちな障害のある方、子育て世代、多様な文化背景を持った方たちを対象とした各種プログラムを実施し、多様な都民への鑑賞及び体験機会の拡充を図ります。		今年度も日時指定の事前予約制を活用したフラットデーを設定し、各展覧会毎に「ゆったり鑑賞日」と「ベビーアワー」を実施した。またやさしい日本語を用いたダイバーシティプログラムにも取り組んだほか、旧門衛所(正門横スペース)において当館のアクセシビリティ向上の取り組みを紹介するテーマ展示も実施した。								
	評価指標	アクセシビリティプログラム及びダイバーシティプログラムの実施		アクセシビリティプログラム計6日+1回実施、ダイバーシティプログラム1回実施							
8	様々な媒体を通じた美術館活動の国内外への発信 ・アール・デコ博100周年を記念した大規模国際展において、専門の広報PR会社を入れ、特設サイトの開設や他館との共通広報等により海外プロモーション活動を展開し、庭美ブランドを広く国内外に発信していきます。 ・コレクション・サイトの多言語化を進め、海外への情報発信を強化していきます。		ヴァン クリーフ&アーペル(VCA)展の実施に際し、共催者の日本経済新聞社と連携して展覧会特設サイトを立ち上げ、積極的な情報発信を展開した。VCA社が独自に展開した情報発信サイトとも連携し、展覧会の見どころや技法上の興味関心に応えた。コレクションのインターネット公開にも積極的に取り組み、ルネ・ラリックを中心とした新規収蔵作品の公開に向けて計画的に写真撮影等の作業を実施した。								
	評価指標	インバウンドを含めた集客力強化に繋がる特設サイトの立ち上げ		ヴァン クリーフ&アーペル展特設サイトの立ち上げ及び情報発信							
総合的な所見(自己評価の総評)											
1925年にパリで開催された「アール・デコ博覧会」から100周年となることを記念し、当館独自の展覧会や各種イベントを積極的に展開した一年となった。その中心となったのは、旧宮邸の施主である朝香宮夫妻が同博覧会を公式視察するとともに、ヴァン クリーフ&アーペル社が宝飾部門でグランプリを受賞した歴史的経緯を踏まえた当館独自の記念企画展「永遠なる瞬間 ヴァン クリーフ&アーペル ― ハイジュエリーが語るアール・デコ」展の開催であった。同社の歴史的なコレクションを中心とした充実した内容に加え、建築家の西澤徹夫氏による館内装飾空間を活かした会場構成が好評を博し、当館歴代記録2番目となる127,000人余りの来館者を迎えることができた。庭園を活用したマルシェ等の開催にも意欲的に取り組み、8月の夜間開館に合わせて実施した「夜会」では、モボ・モガをイメージしたソフトなドレスコードを設定した結果、同時代を愛好する人々が集うカーニバルのような賑わいを創出することができた。回遊性のさらなる向上にも取り組み、本館と新館を繋ぐ連絡通路に導線を新たに整備し、庭園のみの来館者も新館ロビーに自由にアクセスすることを可能とした結果、ショップやカフェの利用者が増加するなど、庭園と館内との行き来が活発化して新たな人流が見られるようになった。アクセシビリティプログラムの充実にも取り組み、避難訓練にもその要素を盛り込むなどホスピタリティの充実にも努めた結果、一部の障害のある方々より「フラッと訪れても気兼ねなく安心して楽しめる美術館」という嬉しいコメントをいただくことができた。(牟田)											

外部評価 評価結果		総括的な意見(総評)	
A		建物公開展では「機能の変遷」をテーマに博物館的資料展示を取り入れ、「第二浴室」の新規公開や周辺文化施設との連携など、建物の歴史的価値を多角的に伝える工夫がされている。記念企画展「ヴァン クリーフ&アーペル」展では、邸宅空間を活かした会場構成と照明演出が高く評価され、広報戦略の成功も相まって目標を大きく上回る来館者を獲得した。日時予約制の導入により混雑が緩和され、鑑賞環境が守られた点も重要である。イベントにも工夫を凝らし「夜会」でのドレスコード設定など素晴らしいアイデアで新たな来館者を獲得した。休館期間を活用した建物の維持管理や調査研究は例年以上に充実し、その成果はトークやツアー、紀要の刊行など教育普及活動に反映されている。2カ月半の休館がありながら総入館者数が前年を超えたことは、美術館の運営力と魅力の高さを示すものといえる。庭園活用について、新館ロビーから庭園への新たな出入口整備により動線が改善し、建物と庭園の一体化に大きな進展をもたらした。彫刻作品の再設置も庭園の魅力向上に寄与している。運営面では、パスポート制度によるサポーター拡充、チケット管理システムの安定運用などが成果を上げ、来館者体験の質と運営効率の両立が進んでいる。朝香宮邸という歴史的建造物を主軸とする美術館の特性上、過度な混雑を避け、空間体験の質を守る取組の継続が求められる。今後は、単なる来館者数の増加を目指すのではなく、東京という大都市における文化的交流の場としての位置付けをより明確にし、その中で適切な規模と密度を保ちながら、美術館ならではの体験価値を深化させていくことが重要である。	
A: 目標を十分に達成し、成果を上げている B: 目標を概ね達成している C: 目標を十分に達成しておらず、改善が必要である			